



2011 年度 未踏 IT 人材発掘・育成事業 採択案件評価書

1. 担当PM

首藤 一幸 PM
(東京工業大学 大学院情報理工学研究科 数理・計算科学専攻 准教授)

2. 採択者氏名

チーフクリエイター:西嶋 悠貴
(東京農工大学 工学部 情報工学科)

コクリエイター:関 喜史
(東京大学大学院 工学系研究科 技術経営戦略学専攻)

3. 委託金支払額

1,517,200 円

4. テーマ名

NFC とソーシャルグラフを用いたクラウド型アドレス帳管理システムの開発

5. 関連Webサイト

なし

6. テーマ概要

近年の爆発的なモバイル端末の普及によって、誰もが携帯電話を当たり前所持するようになった。また、E メールアドレスについても、個人用や会社用など複数のアドレスを持つ人々も多い。

このような状況で問題になるのが、個人間の電話番号やメールアドレスの手間である。最も古典的な方法として、手書きで連絡先を交換する方法があるが、交換する情報を紙に写す必要があり、さらにそれをコンピュータに入力する手間を伴っている。その解決方法として、赤外線通信を用いた情報交換手法が普及した。しかしこの手法では、交換した情報が古くなると、つまり、誰かの電話番号やメールアドレスが変更された場合にアップデートする方法が無い。そのため、多くの人々はこれらの情報が更新されたことをメールで伝えることになり、通知された人々は手作業で情報を更新することになる。これらの作業は送信する人にとっても受信する人にとっても、非常に面倒な作業である。アドレス帳を管理するサービスは多く存在するが、これらは単に vCard 形式のデータを管理しているシステムであるため、変更に対して弱いという問題がある。

本提案では、NFC 技術を用いたアプリケーションとインターネット上に構築された個人のアドレス帳を管理するクラウド環境を構築することにより、情報交換の手間の問題、情報が更新されない問題を一挙に解決するシステムを提案する。

7. 採択理由

携帯電話機・スマートフォン同士の電話番号やメールアドレスの交換・伝達をスムーズにする提案である。

具体的には、近距離無線通信 (NFC) 等で直接情報交換した間柄をユーザ間のソーシャルグラフとして記録しておき、情報の更新があった場合には、グラフ経由で更新情報を通知する。

二次審査での西嶋君の発表は他のクリエイターと少し違って、起業家のそれのようであり、つい、そのように対応してしまった。そのくらい強い動機を内に持っている彼らなので、何かしらやってくれればと期待している。

内容については、NFC ありきで発想している節がある。特定の手段に縛られる必要はないので、よりよい手段があれば、気兼ねなく乗り換えて欲しい。

8. 開発目標

自身への連絡先を知人・友人に一斉に通知するスマートフォン用アプリケーションを開発・提供する。お互いのスマートフォンどうしをタッチさせるといった契機で、利用者どうしがつながり、そのつながり越しに、電話番号やメールアドレスといった連絡先の変更を通知できる。通知を受けたスマートフォンでは、連絡先が自動的に更新される。

連絡方法の途絶を防ぎ、いつでもどこでもつながれる、ということをより確かにすることが狙いである。そのためには、連絡手段そのもの、たとえばメッセージングアプリケーションを提供するというアプローチや、そもそも、皆で同一のコミュニケーションプラットフォーム(現時点なら Facebook 等?)を使うというアプローチの方が直感的であろう。今回、クリエイター達は、連絡先の維持管理手段を提供する、という別のアプローチを採った。周囲からは、そもそもメールや電話という連絡手段が古いのでは?という意見も多かったが、クリエイターは、メール、特に携帯電話機でのメールの若年層への圧倒的な普及を踏まえて、携帯メール(や今後現れるだろう同質の連絡手段)を重視して、そのアドレスの維持管理にフォーカスした。

連絡先の維持管理というアプローチをとったことで、連絡手段の提供というアプローチとは少し違った方向を狙える可能性がある。連絡手段(メッセージング等)は、それ自身が発展していく方向として、どうしても、誰とでも連絡をとれる方向、つまり、つながりを強めていく方向へばかり発展していく。例えば、正確なアドレスを知らずとも連絡できたり、といった方向である。一方で、連絡先の維持管理というアプローチでは、つながりをあえて弱めることがやりやすいのではないかという仮説を持っている。例えば、若年層には、メールアドレスの文字列に恋人の名前を含めるという文化もあるらしい。この場合、別れたときにはメールアドレスを変えることとなる。従来的には、連絡先とは、連絡がついてこそその連絡先、であるが、そうではなくて、時点や期間を限定した連絡先という考え方である。何が何でも誰とでもつながりを強めよう、というだけでなく、ときには相手ごとに連絡可能性を弱めることもしつつ、人生のフェーズに応じてそのときどきの連絡先を維持していく、という管理ポリシーがあり得るのではないかと、SNS の友達一覧に、顔も思い出せないような知人が並んでいるのを見ると、考えるのである。このことは、本プロジェクトでは、連絡先を通知しないことが可能、という機能に表れている。

9. 進捗概要

スマートフォン用アプリケーションと、それを支えるサーバ側ソフトウェアを完成させた。利用者テストも行い、フィードバックを得ている。



図:スマートフォンどうしのタッチによって利用者どうしがつながる際の画面

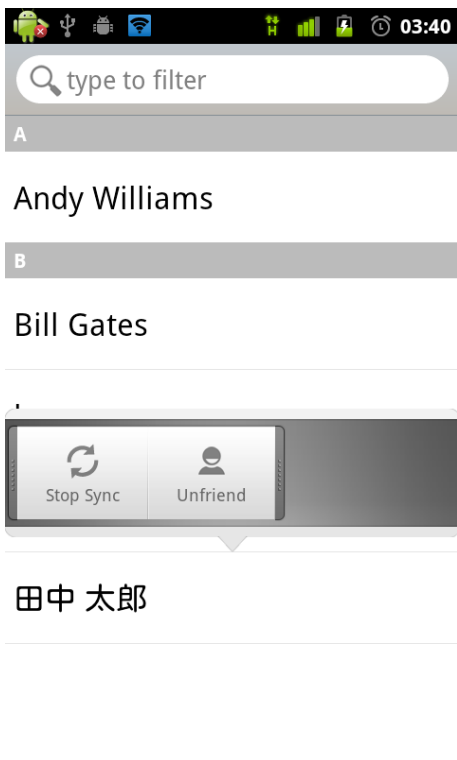


図:知人・友人ごとの管理画面(通知するかしないかの設定が可能)

10. プロジェクト評価

開発期間中に、クリエイターの周囲に試してもらえるところまで到達し、現在は、広く試験してもらえるように準備している、という段階である。公開レベルのアプリケーションを開発し切ったとはいえ、ある意味、世に問うという本番はこれからである。

11. 今後の課題

成否の基準は、利用者をどれだけ獲得できるか、また、連絡先の「つながりを弱める方向も含めた」積極的な管理、という考え方がどれだけ普及するか、であろう。